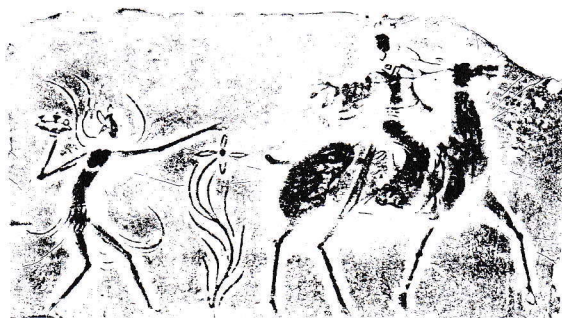




大分県書道

令和7年6月号 No. 420

「墨を入れる」

年度が新しくなり五月に入ると、色々な書展が動きはじめます。今年は県展も九月ですから早めにと思っている人も多いでしょう。中央展では、毎日展・読売展・日展と大きな書展も動きはじめています。

近頃、展覧会の作品作りの時、よく言われることに「墨がよく入っている」とか「墨が足りない」という評があります。「墨が入っている」とはどんなことか、作品が黒々として白い部分が少ないことなのでしょう。

私はいつも作品作りの上で大切にしていることは余白の美しさ、白い部分を輝かせるようにする。そのためには線を深くする。細い太いの別なく深みのある線を引くことで、その周りの白も深まってくると思っています。

「墨が入る」というのは上すべりのベタベタ塗ったものではなく、立体感のある、紙の裏側まで突き通るような墨の入れ方だと思うのです。そのためには速書きをしないで、じっくりと筆を押し込むように、あるいは、ねじ込むようにゆっくりと書くことが大切だと思います。起筆では強く突くことも大切ですし、筆が立っていること、そして、筆の上下運動が必要です。一本の線を引く時に、無数の点をつないでいくようにすることです。この気持ちで書いてゆけば、当然ゆっくりと書くことになるでしょう。起筆の時の落筆の高さと強さも大切です。私は注射針をぶすつと突きたてるようにと思っ

て入れたりもします。起筆は強く、送筆はじっくりです。

起筆を深めるには、篆書や隷書の

代表顧問 戸口勝司
(勝山)

筆づかいを知ることです。逆筆から入れる入れ方になります。また、先月から楷書は「張猛龍碑」になりました。この北魏の楷書の用筆法は線を深め、厳しくするのに役立ちますからしっかりと学んでください。また、ゆったりとした深い線を鍛えるには色々な古典を学ぶことです。鐘繇の「宣示表」薦季直表、蘇東坡、劉石庵等々、形は派手でなく、ぶつきらぼうの醜男のような感じですが線はしっかりと深いのでおすすめです。

しっかりと「墨の入った」作品は太く黒々とした感じで圧倒され嫌に思うこともあります。線が厳しく生きておれば見ごたえのあるものが多いと思います。要は線ですね。